

## 前史と方正交流の歳月

林 郁

### 《前史》

「趙尚志將軍の頭がついに見つかりました。ついでには『趙尚志伝』の映画を作り、テレビでも中央電視台から全国放送しますので、お会いして話したい」という手紙を 2005 年 2 月に中国の映画監督峻巖氏から受け取り、中国東北人のねばり強さに私は改めて感じ入った。そして、ほっとした。1987 年新年、単身で中ソ国境を訪ねたとき、最初にハルビンでお会いした李敏女士から「將軍の首探し」を頼まれてから 18 年。その年月が一気に凝縮して感じられた。

あの時、エスコート役の王英春青年（当時黒竜省外事弁公室に入ってから 5 か月目、22 歳・数え 24 歳）の案内で先ずハルビンで見学したのは東北烈士記念館だった。そこで私は初めて抗日軍総司令 1 軍楊靖宇と次の総司令 3 軍趙尚志の大きな肖像画に会い、「尚志將軍はウラツキコトで殺されました」と王英春さんから説明され、趙尚志の人柄と志の良さ、人気が高さを教えられたのだった。

ウラツキコトは「謀略」の英春先生の造語だとすぐ判った。彼は造語の名人で、「真面目深い」「気持ちあつめて（一生懸命）」「不良深い」「野郎屋（女郎屋のこと・野郎が行くから）」など、ぴったりの言葉を発するので、思わず私は拍手したのだが、趙総司令の最後の話はあまりに痛ましかった。ついで李敏女士（前黒竜江省長陳雷先生の妻、朝鮮族、当時、省政治協商會議副主任、省少数民族事務委員長）から真剣に、真面目深く頼まれたのだ。

「夫の陳雷と私は抗連 6 軍の同志で尚志軍 3 軍と合流して闘いました。あの趙尚志同志が 1942 年 2 月 33 歳の若さで犠牲になったあと、首が日本に持ち去られたと言われています」

楊靖宇のホルマリン漬の首は解放後に長春中央銀行地下室で見つかったが、趙尚志の首は不明のままだという。そこにはたくさんの無名の犠牲者への悼みが重なっている。李敏さんの家族も 6 人全員犠牲になった。父と兄は日本軍に殺され、母と姉は餓死、解放を見ずに逝ったと静かに話された。

そのあと私は王英春さんと零下 40 度～45 度の国境へ。ハバロフス対岸、撫遠の「残留婦人」宅や少数民族赫哲族（ナナイ）、オロチョン族、ダフル族、朝鮮族の郷など訪ね、長谷川テルと劉仁夫妻の墓参もして、旧暦春節を祝い、ハルビン「尚志大街」を見物して、帰国すると 2 月に趙將軍謀殺責任者、元警察隊特務の東城正雄氏を群馬県に訪ねた。東城さんは撫順戦犯管理所で深く反省した中国帰還者連絡会の人だから、正直に謀殺の詳細を語り、資料もくださった。「私は趙尚志の首を飛行機でチャムスから長春に運び、そのあと首は市内の般若寺境内に埋めたと聞きました。埋めた地点は判りません」。さらに「生き残り関係者に尋ねましたが、やはり般若寺境内ということですよ」という手紙がきた。

その旨、私はハルビンに手紙で知らせた。抗日運動研究学者金宇鐘先生と李敏女士はすぐ般若寺に探しに行ったが、見つからなかったと金先生から返事がきた。それが。趙尚志没後 63 年目で見つかったのだ。

般若寺の堀の内側近くから頭骨が出土、李敏女士が駆けつけ、左眼の下の傷で当人と確

認、中央での検査でも確認、中国では大きく報道された。地元新聞は全面特集である。

国家1級監督峻巖氏は北京で活躍中の戦後生まれだが、長春映画出身なので、この英雄伝記映画の監督に選ばれ、訪日調査に見えた。お連れ合いは東京の医薬品貿易会社役員、世界各地で活躍中の実業キャリア、その東京の綺麗なお宅で若々しいご夫妻と話した。過去の史実というより身近な人を語るような話しかたがとても印象的だった。

「李敏さんは日本の林さんに早く知らせなさいと申しました」と言われ、私は「何と誠実な！」と思った。95年春に他界された天国の東城政雄さんもこれで安心できると思った。

趙尚志は1908年遼寧省朝陽県農家の11人きょうだいの6番目に生まれ、父が農民自治運動の参加したため困窮の中で育ち、17歳で入党、黄埔軍学校で若き教官周恩来の影響を受け、卒業と同時に逮捕拷問されたが完全黙否をつらぬき、出獄後すぐ9・18が勃発した。ただちに黒竜江省珠河(尚志県)で抗日遊撃隊をつくり、一面坡から方正県に組織を拡げ、抗日連軍第3軍軍長兼北満総司令になり、第6、9、11軍と土着戦闘隊、山林隊、計2万余を率いて松花江兩岸と小興安嶺ふもとの20余県で農民と共に未耕地を開墾、「生活自立農村根拠地」をつくった。この地道な自立自治活動は高く評価されている。

抗連は15の隊が組織され、東北各地で活動、「方正地区」は趙尚志3軍の重要拠点で、華川、依蘭方面から方正山間部を通過してハルビンに抜けるのが活動主要ルートだった。

日本軍警は反満を恐れ憎んで「匪賊、紅匪」として大討伐し、やむなくゲリラ戦になる。農民が密かにゲリラを支援するので「匪民分離工作」のために農民の集団部落移住囲い込みにかかる。この築造塙を尚志軍が破壊し、残されたビラには「兵士、警官の皆さん、祖国へ帰れ、我家に帰れ。父母、姉弟妹は男を兵隊に取られ、苦しみ泣いている」と日本語で記されていた。抗連に多いという朝鮮人が書いた日本語だと推定された。

珠河の初期同志は94人中朝鮮人43人。反満派は多民族共闘、初々しく平等団結を目指したが、武力猛攻撃で犠牲が増え、北方の山に追い詰められてゆく。現地人は苦力にされ、炭抗や関東軍陣地造営の労務者として連行された。作物の供出も厳しくなった。

日本側資料では「方正近くの陣地にあつて抵抗する匪賊3千余を、蛮勇をもって壊滅、捕虜5百人、残党を依蘭に追い詰め、ついに富錦まで占領した」(1937~38年)

抗連の山寨には黒板、謄写版、古いミシンが残されていたという。昼は山寨に隠れて勉強し、明るい歌を作詞作曲して歌い、木の皮や乾草をかじって夜間に活動したという李敏さんたちは、多民族の絆固く、武力に敗れても心は明るかったという。解放後、李敏さんが歌った抗連歌曲50曲のテープが北京に残されている。

李敏さんは6軍教導隊教官の陳雷先生と結ばれ、夫妻は解放後いきいきと活動したが、文化大革命で別々の暗い牢屋に5年間投獄され、夜中にも尋問され、李敏さんは直腸癌になる。文革終了で解放されてすぐ手術し、命をとりとめた。術後のハンディにめげず要職を勤めあげたその人が趙同志の頭骨のために即刻列車で長春に駆けつけたと聞き、その気力、生命力に感激する。

峻巖監督の手紙は「貴重な歴史資料、東城さんの当時の写真、受け取りました。わざわざ図書館に資料を調べに行つて頂き、感謝の気持ちどんな言葉で言つたらいいか。高橋哲郎先生・推薦の元中帰連事務局長ともお会いでき、非常に嬉しかったと思います。高橋先生の素晴らしい考え、平和の心、感動させられた言葉を映画に入れるつもりです」

趙尚志殉難の地、梧桐河で頭骨の納骨式が盛大に行われ、伝記映画は成功したという。

1992年から16年間、日中共同研究『満洲国とは何だったのか』の協働作業が続いた。中国側（東北淪陥14年史総編室）の学者研究者にとって「偽満」の最も重要な課題は「反満抗日史」である。論文の量も情熱も際立ち、植民地支配の実態へとつながり、「残された日本人問題はたいして重要ではない」という意見が中国側から出された。それは棄民された日本人を軽視しているのではなく、軍国主義の被害者として中国は人道的に処遇した。それでいいではないか。文革で「残留婦人」は苦勞したが、私たち中国人も非常に苦勞した、という意見に対し、日本側（植民地文化研究会・07年から学会）は、「満洲国」の生き証人として「残留日本人」問題、個々の人生は大事であると述べ、その短章は私・林郁が受け持った。戦後60余年たっても軍事支配の後遺症は重い。戦後の国家観も違う。

人の痛みがわかること、互いの痛みと希望を理解し合うことが歴史認識を共有する基であり、友情だと思ったことだった。

## 《方正交流の成果》

方正県が反満抗日の拠点だったことを想うと、そこが関東軍の占領拠点になり、一転、日本人難民の大集結地になり、残された日本人の集中地となり、生かされ、生き抜いた人びとが中日の家族をつくり、日本人公墓が建立されたことが「宝」のように思える。砲台山に散乱する遺骨を悼んだ松田ちゑさんの訴えが中央の周恩来に届き、日本人公墓が建立されてからの維持、王鳳山さんたちの協力、日本からのたくさんの墓参団の受け入れ、日本側の懸命な協力の歳月は、友好の手本だと素直に思う。

牧野史敬さん、大類善啓さんとは30年ほど前に大本教の王仁三郎研究会で知り合い、石井貫一氏を知った。大類さんたちの長い方正交流は、抽象的イデオロギーでなく、現実の生活に役立つ支援を現地の人々に添って積み重ねてきたことが良かったのではと思う。金丸千尋氏には中ソ国境調査でお世話になって以来、実行力と包容性に幾たび敬服したとか。金丸さんと親しい黒竜江省外弁要人孫志堅さんの動じない笑顔も忘れがたい。

80年代すでに藤原長作さんの方正での米作りは高く評価されており、王英春さんも「東北の民が米を食べられるのは藤原長作老のおかげです」と笑顔で言っていた。あの笑い好きのハンサム王英春青年が、今では黒竜江省外事弁公室副主任として、藤原長作さんの米作指導を褒めておられる。越しかた歳月を想うと感無量である。

酷寒の凍結破損で道路が通行止めになった方正にすでに立派な高速道路がのび、羽田澄子さんの記録映画「嗚呼 満蒙開拓団」が完成した。登場する人びとの真情あふれる言葉と白髪になった姿、広い現地と信州泰阜村の「耕して天に至る」風景、歴史観など、素晴らしい記録映画だと思う。奥村正雄さんの植民地文化研究会での「方正日本人公墓の報告」も心がこもっていた。

悲劇を忘れずに乗り越えた鎮魂・友好のシンボル「方正日本人公墓」の基礎は、平和！平和の永続を祈ります。

<はやし・いく：作家、『新編・大河流れゆく』（本稿参考文献）『満州・その幻の国ゆえに』『家庭内離婚』（どれもちくま文庫）など。「植民地文化研究」編集委員>